社交不安傾向者における注意バイアスと記憶バイアスの検討

○富田望¹・西優子¹・今井正司²・熊野宏昭³

(¹早稲田大学人間科学研究科・²名古屋学芸大学ヒューマンケア学部・³早稲田大学人間科学学術院)

キーワード：社交不安障害 注意バイアス 記憶バイアス

Attention Bias and Memory Bias in Social Anxiety

Nozomi TOMITA¹, Yuko NISHI¹, Shoji IMAI² and Hiroaki KUMANO

(¹Graduate School of Human Sciences, Waseda Univ., ²Faculty of Human Care, Nagoya Art and Sciences Univ., ³Faculty of Human Sciences, Waseda Univ.)

Key Words: Social Anxiety Disorder, Attention Bias, Memory Bias

【目 的】

社交不安障害 (Social Anxiety Disorder : SAD) を有する患者には、自己に関連した否定的な刺激に対する注意の接近や回避を表す注意バイアスや、否定的情報の選択的想起を意味する記憶バイアスがみられる。しかし、これらの認知バイアスがどのような状況下において生じるかについて検討した研究は少ない。一方、不安と抑うつにおける認知バイアス研究によると、不安と抑うつが情報処理過程に異なる影響を及ぼしていることが示唆されている (藤原ら, 2007)。SAD 患者は心配や反芻といった反復的な思考様式を採ることが報告されており (Edward et al., 2003)、これらの思考は不安や抑うつと強い関連性を有している。そのため、不安や抑うつの関わりも踏まえた上で認知バイアスの検討をする必要がある。

そこで、本研究では、社会的場面を設定し、一時的な不安や抑うつの高まりが、社交不安における注意バイアスと記憶バイアスに及ぼす影響を明らかにすることを目的とした。

【方 法】

対象者

学生21名 (男性9名, 女性14名; 平均年齢20.52歳, $SD = 1.7$)。

尺度指標

- (1) Liebowitz Social Anxiety Scale 日本語版 (LSAS-J; 朝倉ら, 2002): 社交不安症状の測定
- (2) Beck Depression Inventory- II 日本語版 (BDI-II; 小島・古川, 2003): 抑うつ症状の測定
- (3) State Trait Anxiety Inventory 日本語版 (STAI; 清水・今栄, 1981): 特性不安の測定
- (4) 主観的不安指標 (SUD, 1997): 状態不安の測定

実験課題

(課題1) 注意バイアスの測定: 両耳分離聴課題

左右で異なる音声刺激を呈示し、右耳の単語を復唱することを求めた。右耳には中性語を呈示し、左耳には社会的脅威語と中性語を呈示した。両耳に中性語を呈示した時の正答率から左耳に社会的脅威語を呈示した時の正答率を引いた値を注意バイアス得点とした。得点が0以上である時は社会的脅威語への接近的な注意が生じており、0以下のときは回避的な注意が生じていることを意味する。

(課題2) 記憶バイアスの測定: 単語再生課題

課題1の前に、中性語10個と社会的脅威語10個を記憶するように求め、課題1の後に解答を求めた。単語の感情価毎に正答数を求め、社会的脅威語の正答数から中性語の正答数を引いた値を記憶バイアス得点とした。得点が0以上である時は社会的脅威語を選択的に記憶していることを意味する。

手続き

スピーチ不安を高めるための教示を行った上で1回目の実験課題1・2を行い、実際に2分間のスピーチ課題を実施した。その後、抑うつ気分を高めるために、スピーチに関する反省点の記述を求めた上で、2回目の実験課題1・2を行った。

【結 果】

1. 実験参加者の属性

LSAS-Jのカットオフ値を用いて参加者をSAD高群(11名)と低群(10名)に振り分けた。LSAS-J, BDI-II, STAIの各得点について、群を独立変数としたt検定を行った結果、全ての指標において有意な差が認められた。

2. 不安喚起操作の操作チェック

各実験課題時に不安が喚起されたかを確認するため、ベース時と、2回の実験課題前にSUDを測定した。SUDを従属変数として、群と時期を要因とした2×3の2要因分散分析を行った結果、群と時期の主効果が有意であった ($F(1,19) = 5.023, p < .05$; $F(1,19) = 11.532, p < .001$)。時期の要因に対する下位検定の結果、ベース時と1回目の実験課題における状態不安の差は有意傾向であり、1回目と2回目の実験課題における状態不安には有意差が認められなかった。そのため、各実験課題時において同程度の不安が喚起されたことが示された。

3. 実験課題

注意バイアス得点、記憶バイアス得点、単語再生課題における感情価毎の正答数について、群と時期を要因とした2 (SAD高群・低群) × 2 (1回目・2回目) の2要因分散分析を行った。注意バイアスに関しては、群や時期に関わらず全て0以下の値を示し、回避的な注意バイアスが認められた。さらに、分散分析の結果、注意バイアス得点の交互作用が有意であり ($F(1,19) = 6.834, p < .05$)、低群において、1回目の課題における回避的な注意バイアスが2回目と比較して有意に高かった ($F(1,19) = 6.310, p < .01$)。記憶バイアスに関しては、群と時期の主効果及び交互作用は認められなかった。単語再生課題における中性語の正答数に関しては、群と時期の交互作用が有意であり ($F(1,19) = 4.891, p < .05$)、高群において、2回目の課題での正答数が1回目と比較して有意に低かった ($F(1,19) = 1.909, p < .01$)。社会的脅威語の正答数に関しては、時期の主効果が有意傾向であったが、群の主効果と群と時期の交互作用は認められなかった ($F(1,19) = 5.242, p < .10$)。

【考 察】

SAD低群は不安のみが誘導される条件下で、脅威刺激を回避的に処理することで課題に集中しようとしていたことが示唆された。一方、SAD高群は同様に脅威刺激を回避的に処理しているが、低群に比べてその処理が困難であったことが考えられる。また、SAD高群は、抑うつ気分が高まると、不安のみが誘導される条件下よりも中性刺激を記憶することが困難となることが示唆された。本研究の結果から、SAD傾向者は不安のみが高まった状況では脅威刺激が回避できず、不安に加えて抑うつも高まった状況では中性刺激を記憶することが困難であるため、脅威刺激を基に社会的状況を解釈していることが考えられる。

【引用文献】

藤原裕弥・岩永誠・生和秀敏 (2007). 不安と抑うつにおける認知バイアスに関する研究, 認知療法研究, 33, 145-155.